

◀ 書 評 ▶

菅 邦夫・日野志郎・名尾良憲 編

「慢性病の管理」

東大教授 吉川 政 己

本書は菅邦夫、日野志郎、名尾良憲の三氏が編集され、十分の臨床経験を積まれ全国の大学や病院でご活躍しておられる41名の方々が分担執筆しておられる。その内容は11章に分かれ、第1章 慢性病の考え方と管理、第2章 循環器疾患、第3章 神経疾患、第4章 呼吸器疾患、第5章 消化器疾患、第6章 腎および泌尿器疾患、第7章 がん、第8章 血液および造血器疾患、第9章 内分泌疾患および代謝障害、第10章 アレルギー疾患、第11章 運動器疾患に分かれている。この表題でもわかるように第1章はいわば総論的な記述で、第2章以下が各器官別に分かれた各論的な記載である。その対象は内科領域の成人病を主体として、第7章でがんを内科医、外科医の立場から総論的にまとめて記載している。他は9つの章に分類された各器官に含まれる多くの内科疾患から重点的に5ないし10種類のいわゆる成人病を選択して、それらについて慢性病としての特徴、頻度、経過、治療、予防、リハビリテーションなどを丁寧に説明している。また内科臨床に関連の深い、眼科の立場からみた高血圧、老人の精神障害、

前立腺肥大症、慢性じん麻疹、骨関節疾患等についてはそれぞれ眼科、精神科、泌尿器科、皮膚科、整形外科の専門家に執筆の分担を依頼している。すなわち、種類の多彩な内科疾患の中から慢性病という立場で大胆に疾患の種類を選定し、また関連領域専門家の参加を求めて成人病の診療の座右の書として役立つように作られている点が本書の第一の特徴である。

本書の第二の特徴あるいはむしろ最もオリジナルな点は第1章の“慢性病の考え方と管理”の記載である。すなわちこの中では既にこの方面で定評のある10氏の方々がそれぞれ慢性疾患の概念、慢性病の頻度、統計、社会的側面、治療環境、入院治療、リハビリテーション、慢性病患者の心理、薬剤長期使用の諸問題、慢性病患者の家庭看護および人間ドックについて述べておられる。管理ということばを私も安易に施設の構成、運営ないし経理などの面のみに限定して考えてきていたが、本書の立場では管理ということばの中にそのような項目とともに、リハビリテーションや家庭看護も含めた広義の診療をあわせ考えておられる。

そしてこのような管理を行なう医師の精神的支えとして病気のある臓器、障害のある関節ではなしに病気を担う病人そのものの幸福を求めるべきであるという哲学が述べられている。90ページ近いこの第1章の総論的まとめは、編者もおそらく苦心されたものと思うが、各項目が全体としてよく調和しておりこの著書の大きな特色をなしている。

成人病を主とした慢性疾患の重要性はほとんどすべての臨床家が毎日の臨床で身をもって感じていることである。しかしこの領域の研究面の活発さに比べ、これらの疾患を全体としてよくまとめた著書が意外に乏しいことは、私も常々学生の教育などの際にも痛感していたことである。本書はおそらくそのような欠陥を補って、我国の多くの臨床家の方々に役立つものと信じている。整理された知識で診療を行なうことが診療内容の向上の大きな柱であることは、ここに指摘するまでもない。編集者や執筆者の方々の努力が我国の慢性疾患に悩む多くの人々の幸福に具体的に生かされることを期待して本書の推薦のことばとしたい。

B 5 版 600 頁 ¥ 3,900 円

医学書院刊